南半球便り（その 92）：用務帰国

10 月 18 日

コロナ禍での旅行・入国制限のため、在外の大使が日本に一時帰国する機会は激減してきました。そんな中、先週久しぶりにそうした機会を得ました。たまに帰国すると、今まで見えなかった物が見えてきて新鮮な驚きを覚える一方、数日も経つと「これが日本なのだ。」と納得、順応してしまう。外交官人生を振り返ると、こんなパターンを繰り返してきたように感じます。

１．中部経済同友会での講演

用務帰国の一つの理由は、名古屋に所在する中部経済同友会から講演を依頼されたからです。10 月中旬にパースとメルボルンに代表団を派遣される由にて、現地情勢についての事前ブリーフの意味もありました。

中部経済同友会での講演

尾堂、天野、宮﨑代表幹事を含め、ビジネスの最前線で日夜心を砕いておられる方々の貴重な時間をいただいたので、お行儀の良い平板な話をすることは止めました。「中部経済界にとっての豪州の使い道」という視点から、（１）対中認識の変化に伴う日本の重要性の再認識、（２）国際社会における豪州の重要性の向上、（３）日本企業にとってのビジネス・チャンス（水素、インフラ、宇宙、観光）について私見を披露いたしました。

２．カルチャー・ショック

それにつけても、シドニー発の夜行便で早朝に到着した羽田空港から、東海道新幹線に乗るべく品川駅に到着した際の人混み！駅のコンコース一杯に拡がって高輪側から港南口に押し寄せる人波を見て、「壊れかけの Radio」を聴きながら東京で育った私でさえ、思わず気圧されてしまいました（笑）。

キャンベラでは勿論、シドニーでもメルボルンでも、まずあり得ない経験です。豪州の人口密度の 100 倍を誇る日本の稠密ぶりを肌身で感じました。

もう一つの新鮮な驚きは、新幹線。東京・名古屋は 350 キロ、キャンベラ・シドニーの 280 キロを遙かに上回ります。でも、品川から「のぞみ」に乗ってしまえば、1 時間半弱で名古屋駅に到着。車窓に額をすりつけるほど魅せられていた、水が滴るような鮮烈な緑の色と合わせ、改めて強烈な印象を覚えました。早く新幹線を導入しましょう、豪州の友人達よ。

日本の新幹線

３．日豪経済合同委員会（AJBCC）

用務帰国の最大の目的は、3 年振りに対面で開かれることとなった AJBCC の第 59 回会議に出席することでした。

毎年持ち回りで日本か豪州の都市で双方の経済界の重鎮を集め開催されてきた重要な会議。今回は豪州側から 180 人を超える人が出席登録をしたと聞きました。事前レセプションや晩餐会の熱気、日豪双方出席者の両国間関係に捧げる情熱に心打たれました。日米間、日英間の数々の同様の会議に臨んできた私ですが、いずれにも優るとも劣らない盛り上がりが感じられました。

日豪経済合同委員会の様子

現在これほどまでに発展してきた日豪関係の大黒柱は、三村・日本側委員長を始めとする経済界の方々が長い歳月をかけて営々と築き上げてこられた貿易と投資の絆であることは間違いありません。
【私が代読しました岸田総理大臣祝辞は、こちらでご覧いただけます。】

４．経済界重鎮との意見交換

私にとって何よりも有り難かったのは、この機会に日豪経済関係に深く携わってこられた企業トップの方々のお話をじっくりと拝聴する機会に恵まれたことです。

三村委員長、広瀬東京ガス会長、北村インペックス会長、垣内三菱商事会長、今枝・三井住友銀行専務執行役員をはじめ、様々な業界にまたがって実に貴重なお話をうかがうことができ、またとなく深い学びの機会となりました。関係者の方々にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

５．豪州からの VIP 出席

今回の AJBCC には、日本から西村経産大臣が出席され、基調講演を実施。豪州からも多くの重鎮が参加されました。連邦政府からファレル貿易・観光担当大臣、ビクトリア州からダッソウ総督、南オーストラリア州からマリナスカス州知事といった、贅沢な布陣でした。

日豪経済合同委員会で講演するファレル貿易・観光担当大臣

外務省で行われた林外務大臣とファレル大臣との会談には私も同席しました。豪州が日本にとって信頼できるエネルギー資源の輸出元・投資先であり続けることが確認されたことに意を強くしました。また、経済安全保障、CPTPP・IPEF などの地域の経済秩序作りについて、実に波長の合った意見交換となりました。

６．「10 月 11 日」

振り返ってみると、今回の会議は、10 月 11 日から日本への入国制限措置が撤廃されるという、絶好のタイミングで開催されました。それにつけても、長引いたコロナ禍での辛抱、現下の急激な円安も手伝って、豪州人の訪日熱は日本の皆様の想像を遙かに超えた次元にあります。まさに、商機でもあります。

一時帰国中、私が「シドニーのグレート・ギャッツビー」と愛称する豪州人ビジネスマンの軽井沢の邸宅での夕食会に招かれました。極寒時にはマイナス 15 度まで低下する軽井沢の私邸に 18 メートルの室内スイミング・プールとサウナを設けるとの、日本人では考えつかないであろう大胆な発想に、度肝を抜かれました。流石、イアン・ソープを生み出した競泳豪州！日本のリゾートの質の向上には、ＯＺの発想と資金力が必要だと得心しました。

難易度の高い注文に対応し切れた地元の建築業者の施工振りを称える発言に触れ、細部にも拘り妥協を許さない日本の匠の技と気概をＯＺが高く評価していることを知り、殊の外、嬉しく思いました。

７．文化交流につなげる

もちろん、こうした訪日熱を、財界人の交流や観光にとどめておく必要はありません。2 年ぶりの軽井沢訪問の機会を捉えて、名にし負う大賀ホールを訪ね、豪州の楽団がコンサートを開催する可能性について、対面で相談することができました。

秋の軽井沢大賀ホール

いずれは、シドニーを本拠とする豪州室内管弦楽団（ACO）など、数々の豪州からのアーティストが信州の山里に素晴らしい音色と歌声を響かせてくれることを強く期待しています。

軽井沢は紅葉の始まりでした。
「深山に　紅葉踏み分け啼く鹿の　声聞くときぞ秋は哀しき」
リチャード・トニエッティを始めとする ACO の匠達の弦の音に鹿も聞き惚れることでしょう。

山上信吾